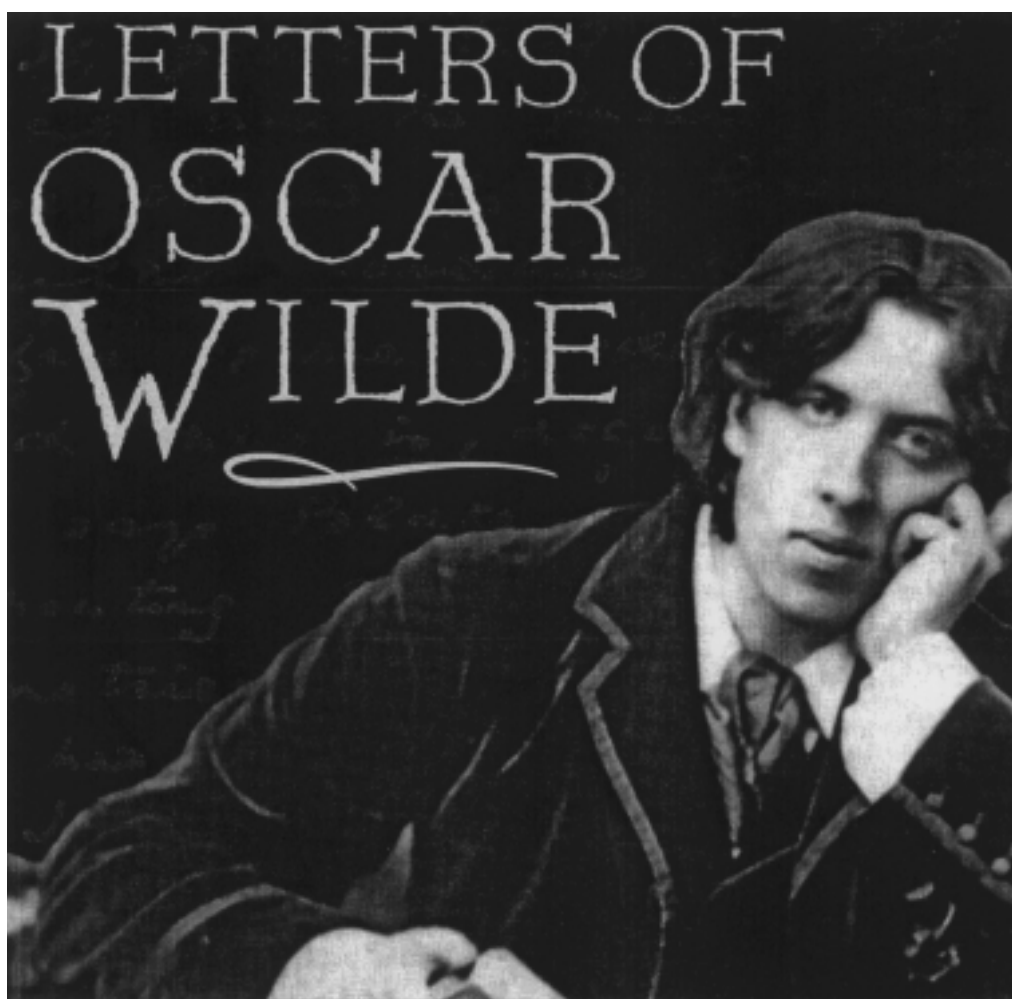


平成 15 年度 1 月ミニ展示

ワイルド直筆書簡展



平成 16 年 1 月 13 日 ~ 2 月 28 日

実践女子大学図書館・短期大学図書館

オスカー・ワイルド

1854-1900. イギリスの詩人、小説家、劇作家。W. H.ペーターの唯美主義や J.ラスキンの芸術観に強く影響を受け、機知と才気を存分に発揮して詩作にふけた。大学卒業後ロンドンに出て社交界の人気者となり、芸術至上主義に身をもって実践する才人として、多くの若者のあこがれの的となった。私生活ではアルフレッド・ダグラスと同性愛の関係を結んだが、これが表ざたとなり2年間レディング監獄に収容された。

本間久雄文庫について

当館の特殊文庫。高名なイギリス文学者で、本学で教鞭をとられた故本間久雄博士の蔵書のなかからイギリス文学関係資料だけを譲り受けたもので、ワイルドの著作やワイルド関係の研究書、自筆書簡、当時の新聞や雑誌に載ったワイルドに関する記事の切り抜き帳、そして本間先生がワイルドの第2子ホランド氏から贈られたワイルドの髪の毛が含まれている。

この展示では

当館が所蔵しているワイルドの直筆書簡4通の中から宛先が分かっている3通の展示を行う。3通の内の2通(と)はワイルド書簡の集大成である Rupert Hart-Davis の *The Complete Letters of Oscar Wilde* (H. Holt, 2000, 1270 p.)には収録されていない貴重なものである。なお、Charles Spurrier Mason 宛の書簡()は、当館が昨年10月に入手したばかりのものである。

To Mortimer Menpes

[?December 1886]

16. Tite Street, Chelsea.

My dear Menpes, I send you a copy of my little book, while I hope you will accept as a small proof of the administration I have in you as an artist, and the pleasure I have in you as a friend. For delicacy, fancy and refinement, we have no painter who is your equal, as I hope that some day I may have something from your hand to adorn and make delightful some book of mine.

Yours

Oscar Wilde

Mortimer Menpes と手紙の内容

ワイルドの芸術観の研究に欠くことのできないイギリス人画家 (1855-1938)。ワイルドと親交が深く第2子の名付け親となった。Menpes はオーストラリアに生まれロンドンで活躍。明治期に来日し、京都や大阪での光景を描いた。

手紙の内容は、ワイルドの作品贈呈、画家としての Menpes 激賞、そして画家 Menpes への希望の 3 部から成り、ワイルド自身の作品の意匠や挿画を Menpes に依頼したい、という気持ちが強く出たものであるが、結局それは果たされることはなかった。本間久雄は、この手紙の日付を第二子が生まれた直後であろうと推測している。

To Charles Spurrier Mason

[?October 1892-March 1895]

16, Tite Street Chelsea. S.W.

My dear Charlie, Will you lend me your copy of the “Duchess of Padua” like a good fellow? I have not got one.

Yours
Oscar Wilde

Charles Spurrier Mason, “Duchess of Padua”、及び手紙の内容

Mason (1868-1940)はアルフレッド・テイラーの友人(同性)で、第 1 回ワイルド裁判で名前が挙げられた。1892 年にテイラーと「結婚式」を挙げている。The Complete Letters of Oscar Wilde には、1894 年 8 月の静養先ワージングから Mason に充てた 2 通の手紙が収録されている。

作品”Duchess of Padua”(『パデュア公爵夫人』)はアメリカの大女優メアリ・アンダーソンを念頭において 1883 年 3 月に完成。初演は 1891 年 1 月 21 日。ワイルドの名前を伏せてニューヨークで、“Guido Ferranti”という演題で行われた。同作品の初出版は劇場用の私家版 20 部(4 部現存確認)で、ワイルドは出版者 John Lane と Elkin Mathews に Bodley Head 版での出版を希望する手紙を複数 1894 年の 9 月に出していることが確認されている。また、ワイルドは『パデュア公爵夫人』の草稿を見たことがない、とその手紙に書いている(そのため、手紙 には”like a good fellow”という表現が使われたのだろうか)。

さて の内容は、Mason が所有する『パデュア公爵夫人』の書物借用依頼する、という単純なものであるが、『パデュア公爵夫人』の出版は正式には 1908 年のことであり、借用依頼した書物が、劇場用の私家版なのか、あるいは、Bodley Head 版の草稿なのか、今ひとつ不明である。また、ワイルドさえ所有していないものを何故 Mason が持っていたかも不明。誠に謎多き手紙である。

テイラーとワイルドが会うのは 1892 年 10 月のことであり、また住所の Tite Street に住居を構えていたのは 1884 年から、破産による借財返却のために売却された 1895 年 4 月 24 日まで(ワイルドは同年 4 月 5 日に男色事件のために逮捕)なので、手紙の日付は少なくともその間と推測できる。手紙の内容から判断してワージングから帰郷した 1894 年秋以降に書かれたものではないかと思われる。

To Carlos Blacker

[6 or 7 May 1898]

Hôtel d'Alsace

My dear Carlos, I am very sorry to trouble you again, but I have received no money this month and if you could let me have fifty francs it would be an inestimable service.

I have heard nothing from Frank Harris at all, and Mr. Hargrove makes difficulty about paying my quarterly allowance for three months, which is unjust. It began to on May 19th 1897, and should be always paid on corresponding date, should it not?

Bobbie is trying to manage it, but in the meanwhile I am without a penny.

Sincerely yours

Oscar

Carlos Blacker と手紙の内容

Blacker (1859-1928)は、イギリス人でありながら、生涯のほとんどをヨーロッパで過ごした。特にフランスに滞在し「ドレフュス事件」に興味を持って関係し、記録している。ワイルドは『幸福な王子』を Blacker に献辞している。Blacker はワイルドとフランスで出会い、1891年の3月に彼をシェラードとゾラに引き合わせている。また、1893年1月に『ウインダミア婦人の扇』の印税の利子を自分が保管している旨をワイルドに知らせている。ワイルドの出獄後も交際は続くが、アルフレッド・ダグラスとの交際が続いていることを知り、止めるよう忠告する手紙を書くも、ワイルドが返事を出さなかったことで、交際は事実上終了した。

手紙の内容は、破産のために困窮したワイルドが、「一文無しの状態なので、50フラン送ってほしい」と経済援助を求めるものである。Blacker は小切手を送り、ワイルドの経済危機を救っている。

本展示の出品書簡は、本間文庫に所蔵されています。展示後、閲覧を希望される方は、「特殊コレクション閲覧許可願」が必要となります。尚、書簡をコピー機で複写することはできません。利用はカウンターにまでご相談下さい。

参考文献

ワイルドについて 『平凡社大百科事典』(平凡社, 1985)

手紙 本間久雄「随想 Oscar Wilde の一書簡」 *英語青年* (1974.4) p. 24

手紙 Holland, M. & Hart-Davis, R., eds., *The Complete Letters of Oscar Wilde*

手紙 と 山田勝編『オスカー・ワイルド事典』(北星堂出版, 1997, 746 p.)